

やぶれ傘

二三二号

二〇二三年六月



そこいらの草をちぎつて打つ草矢 根橋宏次
 噴水のそばへ行かうと立ち上がる 大島英昭
 囁りたる苺の中は白かつた きくちきみえ
 蕎麦食いに行く畦道の夏あざみ 青谷小枝
 背番号付けて走る子春夕焼 廣瀬雅男
 サングラス掛けて家人は女子会へ 丑久保 勲
 犬と子が鯉を眺めてゐる五月 小山よる
 花蛇の羽音如雨露に水を汲む 安藤久美子
 二葉亭四迷の忌なり新茶汲む 瀬島酒望
 田一枚ごとにくつきり畦塗られ 渡邊孝彦
 蠟座^{ろうざ}赫しほととぎす闇に啼き 藤井美晴
 風鈴をつれば川風きたりけり 白石正躬
 校庭のフェンスに絡む灸花 天野美登里
 豆飯や母の小言のなつかしく 秋山信行
 雨粒を転がすやうに鉄線花 有賀昌子

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大 崎 紀 夫 選

吹きだまる花びら踏んで春惜しむ 高橋宜治
 桑の実の枝をゆるりと引き寄せて 中島和子
 新緑にそまるガラスのレストラン 貫井照子
 花曇からくり時計正午指す 野口希代志
 春野菜泥付きのまま持ち込まれ 広瀬 济
 雨粒がしたたり落ちる藤の花 箕田健生
 風光る行くはハーレーダビットソン 村田 武
 青き踏む歩幅それぞれ土手を行く 山本久枝
 花筵少し離れてキッチンカー 吉田幸恵
 菜の花の黄色だらけの日暮れかな 泉 一九
 雨音の繁くなりたる柿若葉 岩藤礼子
 山独活の葉先の見えるリュックかな 江口恵子
 春嵐庭のみどりをかきませて 奥田温子
 日の暮れの近づく畑の葱坊主 木村瑞枝
 春の夜の余震ラジオのビートルズ 倉澤節子

日 雷

大崎紀夫

土手おりるときもおりても春女苑
柳絮飛ぶ湖尻に近く五六軒
春の昼間はシーソーの端にゐる
その辺を雀が歩き牡丹咲く
舟溜りまで一面の諸葛菜

タンポポの絮飛び日暮れすぐそこに
日雷そのあと鳩が飛び立って
著莪咲いて流れに雨後のささ濁り
牡丹散り西から雲がつぎつぎと
揚羽きてすぐ去る上野駅ホーム
落雷の音を近くにバス曲る
築つくる杭が一本打たれゐる

草矢

根橋宏次

耳もとで回す 三味線草の花
 町中華来々 軒に燕くる
 桜の実ポンプを押しせば生きてをり
 舟でゆく中洲のゴルフ場薄暑
 夕方のニュースはじまる豆ごはん
 駅弁を買って乗り込む麦の秋
 二つ三つじやがたらいもが咲いてゐる
 山法師ちぎれ雲から雲ちぎれ
 吹かれゐる草にてんたう虫だまし
 そこいらの草をちぎって打つ草矢

噴水

大島英昭

花びらのついた車がまた通る
 蝶々のせはしき影がとほりけり
 からうじてのこる踏み跡茅花咲く
 穴くぐる前に振り向くはらみ猫
 大ごゑのとほり過ぎればまた蛙
 苜蓿資材遣き場に砂積まれ
 出来ながら消ゆる飛行機雲夕焼
 車座にひとつふたつとくる柳絮
 噴水のそばへ行かうと立ち上がる
 車庫入れのくるまが触る額の花

苺

きくちきみえ

ひとしきり春大根をおろす音
葉桜の影のちらつく立て看板
蝶飛んで工事現場の日曜日
春の月野良猫ちよつとだけ逃げる
終点に着くまで西日受け通し
いるはずの甕の目高を見つけたり
飛花落花隅の公衆トイレまで
たんぽぽの絮はしづかに壊れけり
蝶々はすぐに空地に戻りゆく
囁りたる苺の中は白かつた

夏あざみ

青谷小枝

ばうばうとつちふるまちを過ぎにけり
なんとといふ新緑高架橋真白
かぼんかぼんと虎杖を折つて行く
走り梅雨夜はこつくりと粗炊いて
テーブルにどんとバケツのムール貝
そそくさと参りつぽ焼き屋に並ぶ
やまぼふし上がる気配のなき小雨
青葉風連写で河馬を撮つてゐる
どくだみをコップにいけて茶を淹れて
蕎麦食ひに行く畦道の夏あざみ

春夕焼

廣瀬雅男

時々には割れて日の差す春の雲
啓蟄や駅にワインの直売所
用も無く立ち寄る本屋春の昼
背番号付けて走る子春夕焼
一列に車いすゆく花見かな
つぼ焼きや海に向かひて並ぶ椅子
花ひとつ付けて売らるる茄子の苗
リヤカーの祭太鼓を打つ子かな
ゆるやかな流れに映る花うばら
荒川に潮の満ち干や芦茂る

サングラス

丑久保勲

ボンネットの上に桜が散つてゐる
坂登るへアピンカーブ桜散る
心柱の礎石まはりの犬ふぐり
春浅し寺の柱の刀傷
テーブルにチップを置いて出て臍
陽炎が揺れる区役所駐車場
寺に入る馬酔木の花を確かめに
若楓塔頭までの両側に
突っ掛けてで回覧板を夏近し
サングラス掛けて家人は女子会へ

五月

小山よる

欠伸してマスクがずれる目借時
ミモザ咲く少し古びた洋館に
萬草多く挟まる今日のハムサンド
新しき目覚まし鳴らぬ春の朝
ぽつかりと亀浮かびぬる夏隣
姫女苑子供はみんな駆けてゆき
夏の暮自分の影の長きこと
端つこにバドミントン部青葉風
夕薄暑歩く速度のランニング
犬と子が鯉を眺めてゐる五月

十葉

安藤久美子

花虻の羽音如雨露に水を汲む
射干の花無口な人と眺めぬる
葛切りの午後の時間のゆつくりと
青蘆原何か出て来る音がする
南天の花を主演に石の庭
読み返すおくのほそみち五月雨
青海苔のポテトチップス薄暑光
十葉の群生団子虫数多
水鉢を五月の雨があふれ出す
雑炊に菘豌豆碗豆と溶き玉子

新茶

瀬島酒望

駒返る草に新たなもぐら塚
菫咲くでこぼこ徑を抜けて駅
春帽子前後を逆にして被る
牡丹見て近くの店に寄り昼餉
太鼓橋みな渡り終へ遠足児
リフォームの済みたる貸し家ライラック
葱坊主誰が捨てたか欠け茶碗
メタセコイアの新緑を二階席
二葉亭四迷の忌なり新茶汲む
新緑の街道筋に蜂蜜屋

豆の花

渡邊孝彦

壁塗装の足場ばらされ花薺
たんぽぽが郵便局の真ん前に
吸殻がポイ捨てされて苜蓿
春暁の鉄塔横を行く鴉
もじやもじやとしてひよろひよろと豆の花
春風が唸る櫂の並木道
夜の雨に桜蕊ふる通りかな
田一枚ごとにくつきり畦塗られ
手が届きさうな玉巻く芭蕉かな
竹の皮散る枝道のひとところ

ほととぎす

藤井美晴

こでまりの辺り明るい雨が降る
水辺まで雀隠れを踏んでゆく
逃げ水の向うを路面電車過ぐ
ちよつとだけアベリアに触れ紋黄蝶
磨きたる床に映れる若楓
葉桜を煽りて列車通り過ぐ
大粒の雨明け方の蓮の葉に
差し伸べし手に柔らかき守宮の手
青空の北を見ている夏の鴨
蠍座赫しほととぎす闇に啼き

風鈴

白石正躬

山下りて鑊阿寺で会ふ春時雨
折からの雨に囀りやみにけり
菜畑に菜の花色の月が出て
揚雲雀中州に放る石の音
土手に出て杉菜の丈をながめをり
陽炎に渡船発つ音混じりをり
土手の芥菜刈つてそのまま放つてあり
いつ杯の竹の子ご飯大盛に
鳥の日の朝に土鳩の声がする
風鈴を吊れば川風きたりけり

灸花

天野美登里

風光る棟上げ式の餅拾ひ
竹林の近道を抜け春の蠅
虎杖の芽の先つぼを摘みにけり
展望鏡壊れてあたる猫の目草
地球儀にうつすら埃春終る
昼すぎの雨の止みたる木の芽和
夏きざす「ルパン三世」みたる夜
湾に陽の没りゆく茅花流しかな
校庭のフェンスに絡む灸花
やはらかに降る雨に咲く夏薊

豆飯

秋山信行

白壁を日の移りゆく紫木蓮
物干しに雫のひかる春の暮
ウクレレをギターに代へる春休み
声明のこゑを遠くに青田道
軽トラの荷台に桜蕊の降る
歳時記に母の書き込み花石榴
パソコンを孫に教はる柿若葉
豆飯や母の小言のなつかしく
夕菅や妻と姉との長電話
鈴の音の社に響く花あやめ

◇7月・8月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
7月	4日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	4日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	5日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	7日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	15日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	22日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
8月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン8	大島英昭
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	下落合コミセン1	秋山信行
	7日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン8	丑久保 勲
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	20日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	武蔵浦和コミセン2	丑久保 勲
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

[注] ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

8月4日(金)の下落合コミセン。JR京浜東北線「与野」駅徒歩2分。

直前に改めて案内します。

8月20日(日)の吟行。

集合 10時、JR北浦和駅改札口。

吟行地 見沼・浦和西高の裏側。

句会場 武蔵浦和コミセン2。

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

雨粒を転がすやうに鉄線花
 花種を蒔き終へ迫りくる夕べ
 あやとりのほうき出来たよ桜散る
 藤浪を魚のやうに潜り行く
 春の雨茶屋で一服いたただいて
 花冷えの駅剥げかけの時刻表
 綿菓子に紅ほのとあり遠ざくら
 整備員立つ花冷えの滑走路
 少年のニキビぽつつと葱坊主
 ひとたばを備前の壺へ諸葛菜

鉄線花

有賀昌子